

本場のオペラ「ホフマン物語」を地元の映画館で見た。

2024-11-10

野口幹夫

ニューヨークのメトロポリタン歌劇場で今年上演された本場のオペラを、地元の

湘南シネマの映画でみることが

できた。この映画館では普通の

映画だけでなく、この本場オペ

ラや、歌舞伎も特別の演目とし

て上演していることは知ってい

たが限られた期間で、価格も普



通の映画よりずっと高く、これまで足を運ぶことはなかった。それが、今回最近

友人になったオペラ好きの人が熱心に誘ってくれたので、先週始めてそれをみる

ことができた。今週から始まり、今年のメトロポリタンオペラを「トスカ」や

「フィデリオ」「アイーダ」など毎月1演目半年かけて紹介する計画だそうだ。

今回の上演演目はオペラ「ホフマン物語」であった。オペレッタ「天国と地獄」

の作曲家オッフェンバックの作品だ。昔これの映画版を見たことがあって、楽し

い作品であることは知っていたので、喜んでみた。

詩人ホフマンの恋物語ということになっているが、大変幻想的な場面に満ちてい

る。まずミューズの女神がホフマンの友人と変装して彼につきそう。

その中で彼は3つの恋をして

いずれも失恋をしてしまう。

楽しいのはロボットとは知ら

ずに可愛い娘と思い込んで恋

をする第2場だ。ロボットを

本物のコロラツラソプラノ



歌手が演じるのが、滑稽で楽しい。第3幕の川そばの娼館の場面で美しい曲が有名なホフマンの舟歌だ。

1870年代の作品だが、このころは欧米で大流行していたのは、ターブルタッピングなどの手段であの世との交信をすることだったが、この作品にもその影響が見られ、第3幕では病気の歌手が亡くなった母からの迎えであの世に旅立つというシーンがある。

結局3つの恋物語ですべてホフマンは恋に破れ、絶望するが、そこで肇からそんな彼に付き添い見守っていたミューズの神が彼を慰めていう、「人は恋によって成長するのだから、その辛い思いをあなたの詩に活かさない。」と。

3時間半の長い上演であったが、映画は楽しく、豪華絢爛で、始めから終わりまで、画面に引き込まれていた。

この友人は大変なオペラ通でいろいろと教えてくれた。彼は昔イタリア航空に勤めておられて、日本の観客をイタリアのオペラを見せる旅「オペラツアー」を何度も組み、彼らをガイドされて本場のオペラを数多くご覧になったのだ。

例えばヴェローナではオペラ「アイーダ」を実際のローマのコロッセオ遺跡をオペラの舞台につかい、実際ラクダや馬を凱旋のシーンで使うのだそうだ。桁違いの芸術、ある意味で究極の芸術がオペラだそうだ。

